

Title	弥生時代における武器の形成と展開
Author(s)	寺前, 直人
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/769">https://hdl.handle.net/11094/769</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	寺前直人
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第16504号
学位授与年月日	平成13年9月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	弥生時代における武器の形成と展開
論文審査委員	(主査) 助教授 福永 伸哉  (副査) 教授 都出比呂志 教授 梅村 喬 教授 小笠原好彦

#### 論文内容の要旨

日本列島において、人を殺すための武器の歴史は、農耕社会成立期の弥生時代に大陸の武器を知ることによって始まった。本論文は、古代国家形成へむけて社会が大きく変容し始める弥生時代において、武器がどのように生み出され、どのような機能や社会的意味をもって用いられたのかという点を考古資料の詳細な分析に立脚して解明し、この時代の武器がもっていた特質と歴史的意味を考察したものである。論文は4章からなる本論に序章と終章を加えた構成で、A4判259頁(400字詰原稿用紙換算約540枚)の分量である。

まず、論文の課題と方法を述べた序章に続いて、第1章では弥生前期における大陸系武器形石器の受容のあり方を検討する。同じ時期の大陸系木工具である磨製石斧類が広く受容されるのとは対照的に、武器形石器は北部九州を中心としたきわめて狭い範囲に分析するだけで、新来の武器に対する弥生社会の希求度が意外にも弱かったことを指摘した。

第2章では、在来の狩猟具であった石鏃が武器化する過程を検討し、石鏃の大型化が弥生前期、中期後葉の2時期に顕著になる事実を指摘した。前期の大型化は大陸系磨製石鏃の影響によるが、大型品の割合は少なく、そこに軍事力の強化を読みとるのは難しい。これに対して、中期後葉の大型化は、鉄素材などの交易を契機とした交流圏の拡大に伴って社会的緊張が高まるなかで、武器としての石鏃の発達が各地で進行した結果と評価した。

第3章では、短剣を中心とする携帯武器を取り上げ、形態、製作技法、分布、使用や所有のあり方などを多面的に検討した。弥生中期の近畿地方には、共通形態の石製短剣が多数分布しているが、それは地域の軍事力の増大というより、同じ武器を持つことで共同体成員の等質性を保つことに意味があったと理解した。北部九州地域の銅剣が、しばしば有力墳墓の副葬品として選ばれ、階層分化を促進させる器物となったのとは対照的である。

第4章では、これまで非実用品としての議論に終始することが多かった武器形木器を再検討して機能の分析を行い、石製や金属製の武器の議論と絡んでゆける論点を提示した。

以上をふまえて、終章では弥生時代の武器の特質について再検討し、中期中葉までは武器の安定した発達自体が不明瞭なこと、むしろ武器は階層分化を促進したり、逆に共同体規制を強化する象徴的な器物としての役割が第一義的であったこと、ゆえに、水稻農耕の発展に伴う人口増加や余剰形成のなかで、集団内・集団間に抗争状態が生じたことが武器の発達にあらわれている、という通説的な理解が不十分であることを指摘した。そして、弥生時代における武器の真の強化と発達にとっては、鉄器化の進む後期以降、対外交易を主要な生業とした日本海沿岸地域などの有力

個人の間で、鉄製の武器を所有し、その流通を掌握することの重要性が認識されたことが大きな契機となったという見通しを示した。

### 論文審査の結果の要旨

かつては明快であった議論も、資料が増えるときさまざまな問題点が浮かび上がり、根底から再検討を加える必要がうまれるのが学問の常である。本論文は、農耕社会の形成と同時に土地や水利をめぐる争いが生まれ、その中でつぎつぎと武器を発達させた争乱の時代が弥生時代であった、という通説的理解に対して再検討を迫った意欲的な研究である。

石、金属、木という素材の異なる武器全般に目を配り、膨大な資料を観察分析した成果に基づいて、弥生時代の武器の特質を論じた点が本論文の大きな強みである。研究史的確に押さえ、それによって検討すべき問題の所在、分析方法を明確にし、課題に対する取り組みがなされている点も手堅い。磨製尖頭器の考察において、握り研磨面や断面形態に着目した点などは、考古資料分析のセンスを十分に感じさせる。また、武器の形をしているから武器だという素朴な議論ではなく、その器物が社会から与えられていた意味を重視して機能の本質に迫る姿勢からは、世界の考古学研究の流れを意識していることがうかがわれる。

弥生時代において、武器の存在は集団内・集団間の抗争の発生を直接反映したものではなく、階層化の表示や共同体規制を保つ器物としての役割が大きかったという指摘は、弥生、古墳時代の戦争や軍事組織と国家形成との関わりにかんする近年の議論に大きなインパクトを与えることは疑いない。

ただ、新しい主張であるがゆえに、全体の論理的整合性や叙述構成という点ではなお改善の余地が認められる。たとえば弥生後期以降に、対外交易を主要な生業とした日本海沿岸地域などの有力個人の間で、鉄製武器の重要性が認識されるようになる背景の説明は、いささか不十分であるし、武器類を多量に集積・副葬した前方後円墳がやがて日本海沿岸ならぬ畿内地域に登場する道筋は説得的には述べられていない。

とはいえ、本論文は、オリジナリティ豊かな論点をいくつも含んだ意欲作であり、本審査委員会は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい価値を有するものと認定する。